第4章 山形の文化ものがたり

旧済生館本館

ぷらぽ倶楽部のまち歩き

最上義光歴史館見学

初市

山形市の特色ある文化―文化遺産やお祭り、観光地の蔵王温泉と山寺などについて調べましょう。

生き残った済生館

旧済生館本館は、山形市の文化を語る貴重な文化遺産のひとつです。元は旧大手門跡（七日町口）にあった済生館病院で、1878（明治11）年に初代県令三島通庸が、近代医療推進の県立病院として擬洋風建築（洋風をまねた木造建築物）として、山形の宮大工300人に７ヶ月で完成させたのです。

太政大臣三条実美が「済生館」と命名し、医療ではオーストリア人アルブレヒト・フォン・ローレツを招き山形の医師たちを育てました。済生館とは、「人の命を救う・助ける」という意味で、後に市立病院となり、市民の命を守り、建物は市民から「三層楼」と呼ばれ親しまれてきました。

昭和中期に新しい病院を建築するにあたり、三層楼の保存を願う声があるなかで、財政難や移築場所難などの理由から、市議会で取り壊しの決定がなされました。しかし、当時の大久保伝蔵市長は文化庁に文化財調査を依頼し、1966（昭和41）年に国の重要文化財の指定を受けて、ようやく生き延びたのです。

現在地には1971（昭和46）年に移築復原し、郷土館として貴重な医学資料と郷土資料を収蔵し展示しています。

復原修復工事は、当初の設計図もなく難工事の連続でしたが、山形の宮大工の心意気で見事に甦りました。明治と昭和時代の山形の宮大工たちの傑作と言えます。

山形市街図（高橋由一画）―明治初期の県庁通り―

シティータワー山形七日町より ―現在の旧県庁通り―

市民第九合唱

文化の継承と創造

価値ある歴史建造物や民俗芸能などの文化遺産は、一度失えば再び戻ることはありません。市内各地には、永い年月にかけて培われた歴史と恵まれた風土のおかげで、数多くの特色ある文化が生まれ生き続けています。また、良さに気づかないものがあるかも知れません。

これらを発見し、維持継承していくことは、私たち市民の使命です。常に、価値ある伝統を継承し新しい文化を創造していくことが求められています。

ミニ知識 27

山形を絶賛したイザベラ・バード

1878（明治11）年７月、イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが、横浜から北海道への旅の途中に山形県を訪れて、「東洋のアルカディア」と絶賛しました。多様な作物を植え、きれいに耕されている田畑や勤勉に働く姿、美しい農村風景や周りの青々した山々の印象から、「日本奥地紀行」（平凡社）に著したのです。

山形市については、文明開化や殖産興業策が最先端の街と記しています。バードは工事中の坂巻の眼鏡橋や済生館、完成した擬洋風建築の県庁や郡役所・警察署・県営の製糸工場などを参観し、きれいで活気があると褒め讃えています。

明治初期の産業や人々の生活、おもてなしの様子などが細かく記録してあり、バードの著書やその足跡を辿る「アルカディア街道」散策の旅などが、多くの方々から年々好評を得てきています。

今日の山形の自然景観や文化遺産、温かい人情などは、明治初期の日本の原風景が残っている全国でも稀な地と言われています。まさにバードが言った「アルカディア」（桃源郷）なのです。

元駐日大使ライシャワー氏が山形を「山のむこうのもう一つの日本」として褒め讃えました。その記念碑は山寺「山寺芭蕉記念館」前にあります。

時代はちがっても、二人の山形を見る眼は似ていると考えます。現在も県外の方々は、山形のよさを褒めてくださいます。私たちがこれら地域の文化を学ぶことは、「ふるさと山形」に誇りと自信をもつことに繋がるのではないでしょうか。

イザベラ・バード